

『学院史料』第二〇号によせて

浜 下 昌 宏

『学院史料』第一号が発刊されたのは一九八三年である。爾後二〇余年、殊勝にも継続され、今年二〇〇五年にひとくぎりの第二〇号を世に送る。創刊第一号に寄稿いただいた第一〇代院長岡本道雄教授、長く史料室長であられた渡辺久雄教授・学院顧問はすでに鬼籍に入られた。岡本先生が創刊に寄せた文の一節に「若山さん達の尽力によつて、良い機関誌ができ、これがいつまでも続くことを願つてやまない」とあるが、その若山晴子さんも今年三月に御定年で退任された。ひと時代が区切られた思いである。第二〇号を迎えるに至るまで、多くの方が本誌に寄稿された。バックナンバーを紐解くと、小さな、地味な研究誌ながら、魂が込められていることがよくわかる。

『学院史料』が発行された趣旨は神戸女学院『百五十年史』『二百年史』のためのもの、と明記されているが、^①そうした基礎資料という役割をふまえて、本誌はさらにもっと意義ある位置を占めつつあるのではないかと思われる。それは、今日の本学および本学を取り囲む状況を辛苦して見る私だけの思いではあるまい。

本学の学院史研究は、本学のみならず日本の女子教育史・高等教育史・大学史においても、それを継続する責任がある。それは気負いというのではない。女子教育の先駆として、本学の貢献は阪神間のみならず海外でも活躍する

同窓生を輩出してきた。キリスト教の精神を鼓吹された者、あるいはリベラル・アーツ教育によって培われた人格によって世間と世界から迎え入れられた者、いずれにしても、そうした教育成果は本学の宝であり、私どもは永遠に同窓生の絆を継続しなくてはならず、同窓会組織であるめぐみ会とならんで、史料室は卒業生たちの記録を残し続ける責務がある。また、社会の少子化の影響をこうむり、財政危機のみならず存続の危機に立たされて、建学の理念どころではなくなってきた私立学校もあろう。本学もまた同じような危機を感じないのではない。だが、そうしたときにこそ、本学の社会的存在理由を求めて、あえて建学の原点への回帰を促すのはこの部署においてか。むしろ学院の運営の一線に立つ責任者たちにも志が求められている。しかし史料室もまた、その役割において建学の精神を伝えるべきであろう。すなわち、建学から現状に至る歴史を史料を通して実証し、記録にとめようとしているのが史料室の役割なのだから。本学においても、宣教師文書を中心にみられる草創期の教師たちの情熱と理想、第二次世界大戦へと至る国家権力との対決に苦慮しながらの教育理念の維持、時代に即した教育内容の改編、等々の経緯は、青年女子の人格形成をどうすべきかという教育者の煩悶の歴史である。学院歌にあるように、「風ふきすさぶも 心は変らじ」と、保つべきものを守る勇気が本誌には読み取れる。その精神を支える一助を史料室の役割とすべきであろう。

さらに『学院史料』誌の効用がある。それは、私どもの視野を歴史的遺産へと広げてくれるということである。たとえば、第一六号に紹介されているホルブルック書簡には、一八九五年頃の神戸女学院音楽教育に関する記述があり、「音楽部門は大変良い状態にあります。外国人教員の経費以外の全てを賄っておりす^②」、とある。音楽部が当時の本学に財政面でも寄与していることがうかがわれる。そのような歴史もあつたと知ることで、今日では、そして次の時代には、本学のどの部門が主導することになるのかについて、私どもの想像力が刺激される。

あらためて第一九号までの本誌の内容をかんとんに回顧してみたい。まず、内容を構成する大きな柱のひとつは宣教師文書である。書簡の翻訳と註が、本学創立者タルカット女史のものに関しては第六号に、第二代校長のクラークソン女史のものについては第一号から第五号まで、第三代校長ブラウン女史のものは第七号から第一七号まで、第四代院長ソール女史のものは第九号から第一七号まで、というように、若山さんを中心として堅実な研究成果を残している。第五代院長デフォレスト女史の膨大な文書についても、いずれ訳と註をつけて公開されるであろう。本誌には書簡だけでなく、歴代の校長(院長)と教員にまつわるエピソードや関連事項の研究成果も掲載されている。読み返してみると、現在の私どもへのメッセージとも受け取れる文に出会い、はつとさせられる。クラークソン女史は書いている。「私共の学校は尊敬に価するものでない限り望みどおりの生徒をひきつけることはできない」^③。

もうひとつの大きな柱は、同窓生の動向の記録であろう。同窓会誌『めぐみ』人名索引が第六号より継続して掲載されている。さらに今後は、現在の本学のPR誌『VISTAS』にあるような、今日の日本や世界で活躍している卒業生紹介とは異なる視点から、研究対象に値する誇るべき同窓生に関する調査・研究の成果も載せたいものである。

さて、二〇〇五年度より史料室は大学図書館の一部として運営されることになった。それを学院の組織再編としてたんに受け入れるだけでなく、この再編を転機かつ好機として、図書館とも関連する史料室の業務内容もいくぶん見直してみたい。学院内のいっさいの文献史資料のアーカイヴとしての図書館の機能が保持される一方で、史料室もまたその一翼を担いつつ、歴史的文書の保存と整理、そして公開への作業を粛々と行わなくてはならない。さらに、学院内の史料的価値のあるいっさいの文物、たとえば古い楽器、調度品、美術品、等々の管理に関しても、史料室は作業を進める予定である。本誌が第二〇号以降においても、きたるべき本学『百五十年史』『二百年史』のための基礎資料を提供するとともに、これまでの本誌に通奏低音のように響いている敬神、献身、霊的生活に関する精神もまた、

伝え続けることができるようにと祈らずにはおれない。

註

- ① 『学院史料』 第一号、一九八三年、一頁。
- ② 『学院史料』 第一六号、一九九八年、四一頁。
- ③ 『学院史料』 第三号、一九八五年、五四頁。

(大学図書館(史料室)長)